

# ゲーテと同時代人

——フランクフルト時代のゲーテとクリンガー——

丸山三友

## はじめに

この小論は、共同研究のテーマ『ゲーテと同時代人』から時期を Sturm und Drang 期に限定し、この文学運動に参加したひとりの Genie を対象にして、両者の関係の様相を纏めたものであることを先ず記しておきたい。

さて、„Götz von Berlichingen“ (1773) と „Die Leiden des jungen Werthers“ (1774) によって既に詩人としての地歩を固め、さらに活発な文芸活動を継続していた Joh. W. Goethe (28.8.1749-22.3.1832) は、予てその知遇を受けていたザクセン・ヴァイマル公 Carl August の要請に応えて、1775年10月フランクフルトを去ってヴァイマルに移り、以後宮廷の実務に携わる傍ら文学活動を展開し続け、82年余に及ぶ生涯を終えるまで、数々の傑作を残し、とくに Fr. Schiller (1759-1805) との一致協力から古典主義文学を確立するなど、ドイツ文学史上最も実り豊かな詩人として不滅の存在となる。これに対して同じくフランクフルトに生を享け、ゲーテとは2歳半年少の Fr. M. Klingler (17.2.1752-9.3.1831) も、ゲーテを中核とする時代の新しい文学運動に身を投じ劇作に熱中したあと、安定した地位を求めて1780年9月ドイツを去ってロシアに移り、先ず軍人としての職に就き、以後大公 Paul 付の連絡将校、ついで1785年以降ペテルスブルクの軍人学校の校長、さらに1802年から約15年間ドルパトの大学の主管を委任されるなど、後半はとくにロシアの宮廷の信任に恵まれて高位を保ち、79歳の生涯をドルパトで閉じるまでの長いロシア生活に於て „leiblich in Rußland, geistig in Deutschland“<sup>1)</sup> の気概を保ち続け、晩年に至るまでやはり盛んな文筆活動を続けたのであった。

青年期ゲーテの同時代人の中から本論でクリンガーを採ったのは、生地を共にし、まさに同時代を生き、その長い人生の経路に於ても上記のような外見上の類似性が認められるなどは扱措き、何よりも先ずあの1770年代半ばの文学史に明確な事蹟を遺した Sturm und Drang の文学運動の出發に際して、一方はその才能豊かな先導者として、他方はその熱心な共鳴者のひとりとして、この両者は極めて密接な関係にあったからである。当時フランクフルトに在住したゲーテを中心に展開されたこの文芸運動の期間を1772年秋から75年までと解しているが、この時期二人の個人的関係もまた後述するように緊密なものがあり、さらにこの偉大な先輩が同郷の後輩に及ぼした文芸上の影響も、あの運動の他のどの盟友に於ても大であったことは、例えばクリンガーの第一作 „Otto“ (1774) が、この運動の開始を告げるゲーテの騎士劇 „Götz von Berlichingen“ (1773) に就いたものであること、ひとつを挙げてでも明らかであろう。

## Sturm und Drang 運動

ゲーテとクリンガーの関係を述べる場合、必然的にその背景となる Sturm und Drang の文学運動にも触れておかなければならない。このドイツ特有の文学現象に関しては、たとえそれが短期間のものであったにせよ、特異でまた急進的な運動であったが故に、前世紀後半の文学史家から現代の研究者に至るまで、それぞれの時代の傾向にも影響されて、様々な立場や視点から多くの究明がなされているが、この多様な相互関連がもたらす複雑な様相を示す現象に関しての解明には未だ多くの問題が残されているかに見え、研究者にとってなお魅力的な領域のひとつと言えよう。運動全般に関しての文学史的事実を挙げることは最小限に留めるが、本論に必要なこの運動の概要と、そこに存在する様々な事実のいくつかは、以下の記述のためにやはり採り上げておかなければならない。

先ず、この文学運動の発端は1770年10月のシュトラースブルクでのゲーテと J. G. Herder (1744-1803) との邂逅であり、ゲーテはヘルダーに触発されて Homer や Shakespeare, また Hamann, さらに広く民衆文学にも着目し、その所産としてのゲーテの詩質の変容がこの新しい運動の萌芽となる。そして在来の図式的見解のひとつをここに付加すれば、この運動は

啓蒙主義への対立として国民的自覚とドイツ精神いわゆる *Teutschheit* の宣揚に努め、ドイツ最初の国民的文学運動として、時代の同世代人の共感と支持を集める、と言うのであるが、翌71年夏にはゲーテに共鳴した J. M. R. Lenz (1751-1792) が参加し、さらにこの頃 H. L. Wagner (1747-1779) が同調し、ついでゲーテのフランクフルト帰郷後のこの年の終り、ゲーテを識った J. H. Merck (1741-1791) が協力者となり、また Maler Müller (1749-1825) も、加えてチューリヒ在住の J. K. Lavater (1741-1801) も国外からの支援者となる。

ところで、運動が次第に勢いを増し、クリンガーが参加した1772年の秋<sup>2</sup> をさきに記したように Sturm und Drang 運動の開始の時期と理解しているが、この時点ではゲーテ、レンツ、ヴァーグナー、クリンガーの平均年齢は23歳にも満たず、まさに青春の客気に溢れた若者の集団であった。この集団の存在に最初に気付いたのは Chr. M. Wieland (1733-1813) であるとされ、彼はこれを „Hamann-Sekte“ と呼称して単なる個人的集団として軽視した<sup>3</sup>。さらに運動の担い手達が以上のように年少であったので、時代の一部の勢力、例えば啓蒙主義にこだわる形式主義偏重の側からも、また当時の通俗文学の作家達からも、この運動を若者による愚かな過誤、あるいは伝統に対する反抗に基づく狭義の非合理主義、さらには時代精神の一時的な突飛な現象、または精神的な混乱の産物などと、集団の本質に対する根本的な誤解や、作品の外形に対する反感に根ざす偏見など、厳しく執拗な批判があったことも事実である。

しかし、これら様々な非難に対抗するまでもなく、彼等 Sturm und Drang 運動に参加した青年達には既に自らのものとして共有していた精神的な基盤があった。即ち時代のひとつの観念とも言えるあの *Genie* の思想である。この、ヘルダーからゲーテ、さらに Sturm und Drang 全体に広がった *Genie* の規定はヘルダーの著述 „Vom Erkennen und Empfinden, den zwei Hauptkräften der Menschlichen Seele“ (1775)<sup>4</sup> に見出されるが、要するに個々の社会的条件の中で個々の人間が実現し得る総体性、あるいはこの総体性をひとつのユートピアとして実現し得る存在、それが *Genie* であり、斯様な *Genie* としての存在、換言すれば独自の創造性を可能にする天賦の才を備えた存在、それを彼等は自らに規定し、

自覚していたのであった。さらに彼等はいずれも社会の中間階級即ち市民層の出身であり、市民のエリートとしての自負もこれに加えて、自らに許された芸術の分野での活躍と成果とを自らの果すべき社会的役割と理解していたのであった。斯様な意識と自覚の共有から出発して、運動の担い手達も個々の特性は保持しながらも、集団の一員としての共通の認識、共通の精神を備えて連帯の意識も強く、また多くの事実が示しているように、彼等相互の個人的関係も極めて密接なものがあったことから、これが史上稀にみる強固な団結性をもった文学集団であったこともその特性として注目に値するところである。

### フランクフルトの文芸集団

初期の最も実り豊かな経験をおつめた1年4カ月のシュトラースブルク滞在を終えてフランクフルトに戻ったゲーテは、1772年5月から9月の短期間のヴェッツラーでの生活を除いて、はじめに記した75年10月のヴァイマル移住までの4年間を故郷の地に過ごすことになるが、ゲーテは此所に於て彼の地で培った素養を次第に充実させ、自らの文学的資質の変容を着実に進展させてゆく。そしてまた、レンツやヴァーグナーなどシュトラースブルクとの連携は勿論密接に保ちながら、この故郷の地ではゲーテを囲む文芸愛好の、または文芸志向の青年達による新しい集団が誕生する。即ちゲーテが „Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit“ の中でそれに触れる場合 *geselliger Kreis, kleine Gesellschaft* あるいは *Societät* などと表現しているものがそれであるが、因みにここで „Dichtung und Wahrheit“ の記述に拠ってこの新しい集団に参加した青年達の名を挙げると、Joh. A. Horn (1749-1806), Joh. J. Riese (1746-1827), Hieronymus P. (1735-1797) と Joh. G. (1739-1799) の Schlosser 兄弟、それに本誌第32号の『Fr. M. クリンガーの一書簡』で紹介した P. Chr. Kayser (1755-1823) もその後の長いゲーテとの交流を考えれば、この時期この集団の会合に出席していたであろうと推測される。以上は勿論すべてフランクフルト人である。またゲーテが71年末シュロッサーに紹介されて以後、Frankfurter Gelehrte Anzeigen の主幹として協力者となるダルムシュタットのメルクも上記ホルンやリーゼの後に続いて回想されているが、こ

の箇所ではクリンガーに関する記述はまだ見当たらない。以下の本論ではゲーテのこの「作品」から必要な箇所を引用するので、これに就てもひと言触れておきたい。4部20巻に及ぶこの „Dichtung und Wahrheit“ の内容は豊かで多様なゲーテの経験の集録であるが、この72年から73年当時の集団の活動の様相に関しても、またそこで活躍した個々の Genie の実態に就ても、およそこれが40年後になされた記録であるとはいえ、同時代人による証言として貴重であるのみならず、ゲーテ一流の対象の正確な把握と的確な分析とによって、時代とそこに生きた群像を鮮やかに描き出しており、『ゲーテと同時代人』なるテーマにとっても、最もそれに即した最良のドキュメントとしてこれに勝る記録は他には存在しないであろう。それではゲーテを中心とするフランクフルトの青年集団の活気に満ちた様相をその12巻の一部に窺ってみよう。 „Meine Lust am Hervorbringen war grenzenlos; gegen mein Hervorgebrachtes verhielt ich mich gleichgültig; nur wenn ich es mir und andern in geselligem Kreise froh wieder vergegenwärtigte, erneute sich die Neigung daran. Auch nahmen viele gern an meinen größern und kleinern Arbeiten teil, weil ich einen jeden, der sich nur einigermaßen zum Hervorbringen geneigt und geschickt fühlte, etwas in seiner eignen Art unabhängig zu leisten, dringend nötigte, und von allen gleichfalls wieder zu neuem Dichten und Schreiben aufgefordert wurde. Dieses wechselseitige, bis zur Ausschweifung gehende Hetzen und Treiben gab jedem nach seiner Art einen fröhlichen Einfluß, und aus diesem Quirlen und Schaffen, aus diesem Leben und Lebenlassen, aus diesem Nehmen und Geben [...], von so viel Jünglingen, nach eines jeden angebornem Charakter, ohne Rücksichten getrieben wurde, entsprang jene berühmte, berufene und verrufene Literarepoche, in welcher eine Masse junger genialer Männer, mit aller Mutigkeit und aller Anmaßung, wie sie nur einer solchen Jahreszeit eigen sein mag, hervorbrachen....“<sup>45</sup> 自由奔放の激論の情景が、文芸の世界に才能ある青年達の互いに切磋琢磨しての奮闘が一読して眼前に浮かぶ想いがする。当時のドイツ各地にこれに

類似した集団が存在したであろうが、フランクフルトのこれはゲーテも述べているように、文学史に一時期を画した運動の発祥としての重要性に於て他とは比較にならぬものがあった。

次に、斯様な集団は文芸の世界における伝統的保守的な思潮に対し、また見解を異にする作家や作品に対しては鋭い批判を加え、時には戦闘的な姿勢を示すことがある。これは、さきに挙げた外部からの様々な非難に対抗する Sturm und Drang 運動全体に通じる傾向であるが、その好例が73年9月の終りか10月の初め、この集団の定期的な会合の席でゲーテが一気に書き上げたという即興的な Farce „Götter, Helden und Wieland“である。これは当時まだ名声の頂点にあったヴィーラントが主宰する „Der Deutsche Merkur“ の新年号(1773)に発表した „Alceste. Ein Singspiel in fünf Aufzügen“ にみられる Euripides の歪曲化を非難するゲーテがヴィーラントに放った一矢であった。この諷刺的なファルスFarceの成立に就ても „Dichtung und Wahrheit“ の15巻に記録が残されている。そこでは彼等が劇作の師範としたシェークスピアと、彼等が崇拜する古代ギリシアの偉大な詩人に関する痛烈なヴィーラント批判が展開され、その反ヴィーラント的心情にさきの „Alceste“ が火に油を注ぐ形でゲーテのファルスFarceの成立の契機となったこと、さらにこのフランクフルトの、ゲーテの言う Sozietät の Mitgenosse 達の熱狂的な反応やレンツの協力ぶりも記されているので、やはりここに紹介しておくべきであろう。 „Die Verehrung Shakespeares ging bei uns bis zur Anbetung. Wieland hatte hingegen, bei der entschiedenen Eigenheit, sich und seinen Lesern das Interesse zu verderben und den Enthusiasmus zu verkümmern, in den Noten zu seiner Übersetzung<sup>6</sup> gar manches an dem großen Autor getadelt, und zwar auf eine Weise, die uns äußerst verdroß und in unsern Augen das Verdienst dieser Arbeit schmälerte. Wir sahen Wielanden [...] nunmehr als Kritiker launisch, einseitig und ungerecht. Hiezu kam noch, daß er sich auch gegen unsere Abgötter, die Griechen, erklärte und dadurch unsern bösen Willen gegen ihn noch schärfte. [...] Nun hatte Wieland in der „Alceste“ Helden und Halbgötter nach moderner

Art gebildet; [...] Allein in den Briefen, die er über gedachte Oper in den „Merkur“ einrückte, schien er uns diese Behandlungsart allzu parteiisch hervorzuheben und sich an den trefflichen Alten und ihrem höhern Stil unverantwortlich zu versündigen, indem er die derbe gesunde Natur, die jenen Produktionen zum Grunde liegt, keinesweges anerkennen wollte. Diese Beschwerden hatten wir kaum in unserer kleinen Sozietät leidenschaftlich durchgesprochen, als die gewöhnliche Wut, alles zu dramatisieren, mich eines Sonntags nachmittags anwandelte, und ich, bei einer Flasche guten Burgunders, das ganze Stück [...] in e i n e r Sitzung niederschrieb. Es war nicht so bald meinen gegenwärtigen Mitgenossen vorgelesen und von ihnen mit großem Jubel aufgenommen worden, als ich die Handschrift an Lenz nach Straßburg schickte, welcher gleichfalls davon entzückt schien und behauptete, es müsse auf der Stelle gedruckt werden. Nach einigem Hin- und Widerschreiben gestand ich es zu, und er gab es in Straßburg eilig unter die Presse.“<sup>7</sup> この15巻の執筆完了が1813年7月という時期を考慮に入れる必要もあろうが、いずれにしても以上の記述に明らかな、反対者に対する厳しい批判性や攻撃性は1773年当時の指導者ゲーテを始めとするこの文芸集団全体の性質であったことは勿論である。Max Rieger の伝えるところでは、このファルスが書き上げられたのは定期的に会合が開かれていた Rittergasse のクリンガーの住まいの一室であったことになる<sup>8</sup>。

ついでまた、その場の青年達を喜ばせたのであろうこの作品のもつ鋭い諷刺性も指摘しておかなければならない。この所産からも窺われるように、諷刺がフランクフルトのゲーテの集団、さらに広く Sturm und Drang の Genie 達の文芸批判の手段として用いられていたことは明らかである。W. Rieck などは Sturm und Drang 運動初期の諷刺的な傾向に着目して、彼等 Genie 達が時代の文芸世界と対決して展開した活動の様相を、„Dichtung und Wahrheit“ 18巻のゲーテの表現を借りて、「前哨戦」としてこの集団の活動の性格を捉えている<sup>9</sup>。この言葉の意味する

ところを知るために、その一節を引用しよう。ゲーテはここでは、またあらためて70年代半ばの Genie 達の奮闘を回顧しているかにみえる。„Tiefer Eindringende [...] werden doch geneigt bemerken, daß allen solchen Exzentrizitäten ein redliches Bestreben zu Grunde lag. Aufrichtiges Wollen streitet mit Anmaßung, Natur gegen Herkömmlichkeiten, Talent gegen Formen, Genie mit sich selbst, Kraft gegen Weichlichkeit, unentwickeltes Tüchtiges gegen entfaltete Mittelmäßigkeit, so daß man jenes ganze Betragen als ein Vorpostengefecht ansehen kann, das auf eine Kriegserklärung folgt und eine gewaltsame Fehde verkündigt.“<sup>10</sup> それでは、この前哨戦に於て陣頭指揮をとったのは勿論ゲーテであり、その下にあつて上記の引用の表現通り様々な形での戦いが Genie の戦士達によって戦われたのであつたが、さてその戦場の舞台となつたのは何処かと言えば、それは先づ演劇の世界であつたと言ふことになる。さきに、ヘルダーに触発されたゲーテの詩質の変容が Sturm und Drang 運動の萌芽であると述べたが、ヘルダーが果たした役割は実に重要なものであつた。繰り返すならば、ひとつはゲーテに偉大なイギリスの劇作家への道を示したこと、いまひとつは中世ドイツへの、具体的に言えば Faust や Götz, Hans Sachs や Luther など 16世紀ドイツ固有の精神文化への道を示したことであつた。これによつてゲーテに新しい沃野が開け、その彼方の一点でこの二本の道が交つた所に培われた作物があつた。„Geschichte Gottfriedens von Berlichingen mit der eisernen Hand. dramatisiert“ (1771) であり、さらにこれが 1773年初頭からの „Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand. Ein Schauspiel“ への改作へと進展したのであつた。既述のように1772年秋を Sturm und Drang 運動の開始の時期とすれば、73年6月のこの „Götz“ の誕生を以て演劇史におけるこの運動の発足と言ふことになる。

最後に、フランクフルトのクリンガーとゲーテとの関わりを述べる前に、いまひとつ重要な事柄に就て記しておかなければならない。それは、彼等 Genie 達が何故ひたすら劇作に集中したかという彼等の資質の根本にも触れる問題である。その理由は、彼等の指導者とするゲーテの „Götz“ を以て作品史上この運動の開始とする外面的結果的な事実に見出されるも



のではなくて、彼等市民階級のエリート達の意識の中に本来の根拠を求めなければならないのである。彼等が文学活動の最良の方法として演劇を選んだ動機を要約すれば、先ずそれが自らの生活感情を表出し、自らの生に関わる問題を提起するための最適の手段であったことである。彼等は劇作という行動の中で自己の内面を吐露し、それによって自己の存在の言わば確認を求めようとした。換言すれば、劇作は彼等にとっては唯一その中に自己を投影することのできる最も望ましい生そのものであったのである。ゲーテの „O wenn ich jetzt nicht Dramas schreibe ich ging zu Grund.“<sup>11</sup> は彼にとって劇作即ち生であったことを示す心情の実に端的な告白であった。従って Sturm und Drang の演劇は、例えば観客に与える精神的浄化などを目標のひとつとする啓蒙主義者のそれとは全く異質の、作家の全く個人的な欲求や個人的衝動の所産であったのであり、史上それ以前には見られない新しい傾向であった。

だが同じく劇作の中に自己を投影させようとした Genie 達の中で、クリンガーの場合は如何であったろうか。ゲーテにとっての劇作は恵まれた豊かな環境の中で修得した世界体験に基づく自己の再表現であったとすれば、生い立ちからして与えられた現実が厳しく、また1772年9月に漸くギムナジウムを修了したばかりのクリンガーにとってのそれとは相違するところ多大なものがあつたのは当然である。即ち世界体験に極めて乏しい、K. May の言葉で言えば Weltferne<sup>12</sup>、世間知らずのクリンガーにとっての劇作活動とは、自らのファンタジーが作り出す世界の中での、その度毎の新しい自己構築の作業であつたと言うことになるであろうか。

### クリンガーとゲーテ

クリンガーに関しては Maximilian Rieger (1828-1909) による „Klinger in der Sturm- und Drangperiode“ (1880) と „Fr. M. Klinger. Sein Leben und Werke. II“ (1896) の二巻の労作が遺されている。このリーガーはクリンガーが愛した妹 Agnes (1757-1815) の次女 Johanna Charlotte を母とし、自身11篇の作品をもつ著作家でもあるが、敬愛する大伯父に関して祖母から母へ、母から自身へと語り継がれた大切な „Familienüberlieferung“ に基づいてクリンガーの生涯の実録をまとめ、そ

れに各作品への自らの解釈をを加えて刊行したのがこの二巻のクリンガー評伝である。ドイツ時代のクリンガーと作品を語る前記の上巻には、1774年夏と推定されるクリンガーのギーセンからの、フランクフルトの親友カイザー宛のものを始めとして、57通の書簡が „Briefe Klingers“ として副えられている。因みに本誌第32号に、23. Aug. 1773. と日付のあるカイザー宛の書簡を始めて活字にして公表したが、これはリーガーの目に触れなかった、おそらく現存するクリンガーの書簡の中では最古のものであろう。またロシア時代のクリンガーと作品を詳述する下巻には „Briefbuch zu Fr. M. Klinger.“ として291通の書簡が収録されて添えられており、血縁者が語る Biographie として、さらに貴重な書簡集の集録として、この両巻の存在は今日なおクリンガー研究者にとっての基本の書として貢献するところ多大なものがあると言うべきである。

さて、1773年当時のあの文芸集団の中では既述のように社会的経験そのものもいまだ乏しく、しかし却ってそのために集団の中では最も積極的な参加者のひとりがクリンガーであったと言えよう。前述のように前年の秋にギムナジウムを終えたばかりの、未だ全く萌芽の、あるいは全く未開の状態ではあったが、しかし天賦の才に恵まれたクリンガーは自らの資質に合致するものをこの集団の活動の中に始めて見出したのであった。その故に文芸への激しい意欲と情熱が彼の内部に於て急速にその度合を高めていったことであろう。その限りではクリンガーは集団の中の他のどの当地出身の青年にも劣るものではなかった筈である。ギムナジウム卒業までの限られた交友関係もこの文芸集団への参加によって拡大され、さらに同時にクリンガーの世界はこの時期から質的にも大きく変貌することになる。それは言うまでもなく、ゲーテ、そして時代の文芸の世界に活躍しようとするレンツなど Sturm und Drang の運動家達との接触と啓発による詩人クリンガーが誕生する母胎の形成につながっていく。またクリンガーが集団の中で如何に積極的な Mitgenosse であったかを語る事実として、さきのゲーテのフェルス „Götter, Helden und Wieland“ が書き上げられたのは毎土曜に会合が開かれていたクリンガー宅であったことはさきに記したが、クリンガーが翌74年4月大学入学のためギーセンに移るまでの1年6カ月に獲得したもののひとつが、言うまでもなくこのゲーテとの交友

関係であり、二人の個人的関係は親密の度合を時と共に深めていったのであった。

クリンガーにとってギムナジウム卒業からのこの18カ月は、一面また大学入学のための学資を蓄積するための期間でもあったのだが、ゲーテはクリンガーの入学に際しても、自身と同じくメルクの Frankfurter Gelehrte Anzeigen の寄稿者であり、かねてから面識のギーゼンの法学教授 L. J. F. Höpfner (1742-1797) に宛てて指導を依頼する書状を送ったりなどしたが、さらにゲーテはクリンガーに対して経済的な援助まで行っていたのであった。のち、ゲーテを頼ってひと足早くヴェイマルに移ったレンツに宛てたクリンガーの „Hier haben Sie meine Geschichte.“ に始まる自己紹介的な書簡の一部にこの間の事情が語られている。先ず8歳で父の急死、クリンガーと姉の Anna、妹の Agnes の三人の幼い子供を養う母の苦闘、さらに学業の継続も困難な生活の窮乏に立ち向かった自身を淡々と語り、ついで „Nun wollte ich auf Akademien gehn, hatte keine 100 fl. Ich ward mit Goethe bekannt. Das war die erste frohe Stunde meiner Jugend. Er bot mir seine Hülfe an. Ich sagte nicht alles und gieng so, weil ich lieber sterben wollte als unverdient was annehmen. Die 100 fl. waren bald all. Der grosse Goethe drang in mich, machte mir Vorwürfe und nun leb ich schon ein ganzes Jahr von seiner Güte — o Lenz, bin ich Ihnen nicht verächtlich? Ich wäre tausendmal lieber gestorben, kann ich Ihnen sagen was michs kostete. Aber Goethe, oh wenn ich seiner werth würde, wenn ichs ihm erstatten könnte, um froh zu sterben. ...“<sup>13</sup> これはレンツが Frau von Stein に、ゲーテには内密にと断って送ったクリンガーの書簡の写しの一部であり、〔Weymar, Mitte 1776〕と日付も明らかではないが、文面からは敬愛する偉大な同郷の先輩の友情には衷心から感謝しながらも、金銭的な援助を受けざるを得なかった自身に対するクリンガーの複雑な屈折した心情が窺われる。一方、一年有余の密接な同志的な文芸集団の活動の中でクリンガーのすぐれた資質と才能を識ったゲーテにとっては、斯様な支援は彼のおかれた状況に於ての彼に対する励ましものしるしであり、また他の誰にも示したことの無いゲーテの深い

友愛の表現であったのである。

さて „Dichtung und Wahrheit“ の14巻では往年の文芸上の盟友の回想が語られているが、先ずレンツ、次いでヴァーグナー、そしてクリンガー、さらにラーヴェーター、メルク等々と続き、そこではそれぞれ対象に即して異った語り口で人物像が浮彫にされている。以上のような親密な関係にあったクリンガーの場合は如何であろうか。よく引用される箇所であるが、ここでもやはり本論の趣旨に副って、ゲーテのクリンガー把握の形相を眺めて見よう。 „Klingers Äußeres...war sehr vorteilhaft. Die Natur hatte ihm eine große, schlanke, wohlgebaute Gestalt und eine regelmäßige Gesichtsbildung gegeben; er hielt auf seine Person, trug sich nett, und man konnte ihn für das hübscheste Mitglied der ganzen kleinen Gesellschaft ansprechen.“ と容姿を誉め、続けて „Sein Betragen war weder zuvorkommend noch abstoßend, und, wenn es nicht innerlich stürmte, gemäßigt.“ と態度物腰を要約し、さらに „Man liebt an dem Mädchen was es ist, und an dem Jüngling was er ankündigt, und so war ich Klingers Freund, sobald ich ihn kennen lernte. Er empfahl sich durch eine reine Gemütlichkeit, und ein unverkennbar entschiedener Charakter erwarb ihm Zutrauen.“ と人柄の美質を指摘し、さらに彼の家庭の事情にも触れたあと „Alles, was an ihm war, hatte er sich selbst verschafft und geschaffen, so daß man ihm einen Zug von stolzer Unabhängigkeit, der durch sein Betragen durchging, nicht verargte.“ と貧しい境遇に負けぬ独立不羈の態度に好感を示し、次いでクリンガーの資質の根幹に及んで、 „Entschiedene natürliche Anlagen, welche allen wohlbegabten Menschen gemein sind, leichte Fassungskraft, vortreffliches Gedächtnis, Sprachengabe besaß er in hohem Grade; aber alles schien er weniger zu achten als die Festigkeit und Beharrlichkeit, die sich ihm, gleichfalls angeboren, durch Umstände völlig bestätigt hatten.“ と彼に天成の、また環境から獲得した美点を的確に把えている。次いで青年クリンガーにとって „Emil“ が Haupt- und Grundbuch であった程 J.-J. Rousseau (1712-1778)

の思想に共鳴していたことを伝え、その理由を、„Denn auch er war ein Kind der Natur, auch er hatte von unten auf angefangen ; das, was andere wegwerfen sollten, hatte er nie besessen, Verhältnisse, aus welchen sie sich retten sollten, hatten ihn nie beengt ; und so konnte er für einen der reinsten Jünger jenes Naturevangeliums angesehen werden...“ と説明している。後年のクリンガーは著作 „Betrachtungen und Gedanken über verschiedene Gegenstände der Welt und der Literatur“ (1803-05) に於て、大革命に思想的な培養剤の役割を果たした百科全書派、とくに D. Diderot (1713-1784) の業績を高く評価しているが、既にこの時期、ルソーに私淑するなどは、青年クリンガーもまさに「時代の子」であったことになる。ゲーテはこのあとさらにこの時代の子の内面に触れて „Er hatte nicht mit sich selbst, aber außer sich mit der Welt des Herkommens zu kämpfen, von deren Fesseln der Bürger von Genf uns zu erlösen gedachte. Weil nun, in des Jünglings Lage, dieser Kampf oft schwer und sauer ward, so fühlte er sich gewaltsamer in sich zurückgetrieben, als daß er durchaus zu einer frohen und freudigen Ausbildung hätte gelangen können : vielmehr mußte er sich durchstürmen, durchdrängen ; daher sich ein bitterer Zug in sein Wesen schlich, den er in der Folge zum Teil gehegt und genährt, mehr aber bekämpft und besiegt hat.“<sup>14</sup> と把握している。

以上のゲーテのクリンガーの内面解釈を踏まえて言えば、先ずクリンガーのルソーへの傾倒、これはごく自然に理解される。自らが始めにおかれた狭隘な環境の中で、即ち旧来の慣習が支配する従属社会の中で、ルソーはそれからの本然的な自然への個の解放を標榜したのであったが、それと自我との困難な戦いを強いられたクリンガーは、それだけにより強く先ず自己の内部に沈潜し、そこでの蓄積を基盤にして外部に向かって突進し自己を押し貫こうとした。抽象的な表現ではあるが、これが青年クリンガーの初期の衝動の根元的な様相である。これはまた、拡大すればそのまま Sturm und Drang の青年達とその文学運動に一貫する基本的な傾向に合致する。即ち彼等市民階層出身の若者達の革新的な運動は、既存の保守的

な秩序社会の制約に対する文筆の世界での批判と反撃であった、と言う通念的な表現をここでも繰り返さなければならない。また付加して言えば、ゲーテの前文にみられる二つの動詞 „sich durchstürmen, durchdrängen“ は遡ること40年、あの Sturm und Drang の躍動の時期を回想してのおそらくゲーテの意識的な使用であろう。そうだとすれば、クリンガーはここに示された自らのもつ本質的な傾向からして、さらにまた自らの作品名が文学史のこの一時期に冠せられたことも併せて、あの運動で活躍した代表者であったと付会することも可能であろう。その詩才に於て他の盟友達、例えばレンツを挙げれば、彼の詩想豊かな才能と現実社会の体験に富んだ高度の自然性や巧みな写実性を具現する芸術に比べて、クリンガーの初期作品は及ばざること数歩と言わなければならないが、しかし、ひたすら忠実に懸命に、また確固たる態度を堅持して劇作に熱中したクリンガーを、Sturm und Drang 精神の最も純粋な具現者として貴重な存在と言う H. Berendt の評価<sup>15</sup>は以上のことから当然肯定すべきであろう。それでは斯様なクリンガーの劇作品は如何様のものであったのか。Sturm und Drang 初期の様態に就て種々述べてきた本論では、この運動の最初の所産であるゲーテの騎士劇に倣ったクリンガー劇の第一作を対象にして、そのいくつかの特色を指摘しておかなければならない。

#### クリンガーの騎士劇 „Otto“

Chr. Hering は長期にわたるクリンガーの創作活動を五期に分類し、1780年までのドイツ時代のそれを劇作中心の第一期と、劇作品に長篇小説が加わる第二期とに分割しているが<sup>16</sup>、ジャンルと作風の変化に著目してこの分類は明確な根拠をもつものとして賛同される。ではこの第一期であるが、第一作 „Otto“ (1774) から未完の „Der verbannte Göttersohn“ (1777) にいたる9篇の劇作集中のこの時期こそクリンガーが全力を尽して Sturm und Drang 運動に自己を投入した時期であり、また文学史上の Sturm und Drang 運動の時期におよそ合致するのだが、この中では、„Die Zwillinge“ (1775)、„Die neue Arria“ (1776)、„Simsone Grisaldo“ (1776)、„Sturm und Drang“ (1776) など一連の魅力に富んだ劇作品が相次いで発表される。就中第三作 „Die Zwillinge“ は、例の兄弟相克を

テーマにして引き締まった構成の中でクリンガー的な、即ちまさにまた Sturm und Drang 的な性格を備えた主人公を登場させ、劇作家クリンガーの独自性や才腕が始めて明確に発揮された傑作であり、クリンガーの初期作品群の中の、また Sturm und Drang 文学全体の中での代表作と考えている。

ゲーテが1771年の晩秋6週間で書き上げた“„Dichtung und Wahrheit“の13巻に誌している „Geschichte Gottfriedens von Berlichingen“ から „Götz von Berlichingen“ への改作は73年初頭からと既述したが、あの活気溢れるフランクフルトの geselliger Kreis の中でこのゲーテの改作の草稿などから、それに刺激を受けたクリンガーが自らの騎士劇創作を密かに思案していたであろうことは容易に想像される。そしてその執筆開始の時期などを伝える記述はリーガーにも見当たらないが、おそらくこの年の秋から冬にかけてではなかろうか。そして翌74年4月の大学入学のためのギーゼンへの移転から夏の頃にはまだ創作の最中にあったことが、メルク宛の法学教授ヘプフナーの書簡<sup>17</sup>から窺われる。完成は多分この秋、そして年末には原稿がライプツィヒの Weygand に送られ、翌75年2月末のギーゼンからフランクフルトの親友 D. Schumann 宛の書簡からは、この作と第二作 „Das leidende Weib“ が既に印刷を終えていたことが知れる。

ではこの „Otto“ であるが、この作品に対しては既に同時代の批評家を始め研究者の殆んどが、定式的とも言える態度でその欠点を指摘している。それらを集約すれば、ゲーテの „Götz“ との類似性と、シェークスピア劇の歪曲、この二点である。類似性に関しては、創作の経緯からしてこれが完全に „Götz“ の影響の下にあったことは否めないであろう。ドイツ中世の騎士社会を舞台として、登場人物の配置からその性格、劇の筋立、ミリュー全体が „Götz“ の模倣であるとして、Sturm und Drang 運動そのものに対して批判的であった同時代の J. J. Eschenburg などはこの作を、新しいドイツの演劇のもつ粗野で無規範な Göthische-Lenzische Manier の一例と非難した<sup>18</sup>。たしかに、クリンガーに限られた様相ではないにしても、この作品での殊更な三一致の法則の無視、列挙すれば、全5幕を構成する場面は54を数え、登場人物は35名、さらに端役がこれに加わり、また時間の進行も一貫性に乏しく常に偶然的であり、場所の転換も

殆ど恣意的である。さらに最も重要な欠点を言えば、さきに指摘された筋立の分裂であろう。即ちここでは Otto-Handlung を主軸としながらも、さらに Herzog Friedrich-Handlung と Hungen-Handlung が存在し、またこの二つが相互に必然的な関連性を有していない。以上の短所は一見して誰の目にも明らかである。次に、シェークスピア劇の歪曲性を一点に限って言えば、Herzog-Handlung の中にシェークスピアの“King Lear”からの借用が認められることである。即ち、忘恩の娘達とリア王の関係がここでは Friedrich と息子 Karl の父子相克の図式に移し換えられて、シェークスピアとは懸け離れた人間像の描出によって悲劇性は全く異質の趣を呈している。

„Otto“ と „Götz“ との比較対照にも踏みこむべきではあろうが、仮に Sturm und Drang の Genie 達にとって言わば共有財であったシェークスピア劇の把握ひとつを採っても、„Götz“ のそれはクリンガーにおけるよりも遙かに本質的であり、また包括的であったと述べておきたい。クリンガーが偉大なイギリスの先達に見出したものは、先ず自らの資質に合致した情熱であったのである。しかしクリンガーの第一作では、シェークスピアに於ける非凡な人間の情熱がもたらす溢れる激情、荒々しい挙動、荒れ狂う怒りの姿等々を悲劇にとって必要な構成要素と見るのではなく、それらを言わば悲劇の終極と見做し、本質的なもの、根元的要素と把握していたことが窺われる。ここにもゲーテのシェークスピア理解とクリンガーのそれとでは基本的な相違が存在していたことになる。またいまひとつ付言すれば、„Götz“ の世界には人物像、筋の運び、ミリュー全体に於て、ヘルダーに教えられたゲーテの中世への回帰、即ちあの Teutschheit への自覚が汲み取れるが、„Otto“ の舞台ではそれは末だ不明瞭で曖昧であり、中世騎士劇と言う外殻を共にしても、その核心には大きな隔たりがあったと言わざるを得ないのである。

但し、„Otto“ にも既に劇作家クリンガーの才幹を窺い知る 魅力的な場面も部分的には存在している。例えば Hungen-Handlung にみられる息子達、幼い Hans と大人ぶる兄 Konrad の対話にフランクフルト訛を多用して、少年の世界に生き生きとした雰囲気醸し出すところなどは、あとに続く „Die neue Arria“ の Donna Solina、また „Simsone Grisaldo“



の Almerine, それぞれの女性像に垣間見る妖しいまでの官能美を描き出すクリンガー独自の写実的表現力の一端を既にここに示していると言えよう。そしてこの巧みな写実性は他の Sturm und Drang の作家達の遠く及ばぬ、クリンガー独得の一種生々しいまでの現実感を伴っている。

斯様な部分的には見るべき場面をもちながらも、全体的には既に述べたような短所によって、„Otto“ の評価はおよそ定まっているようにみえる。しかし重要なことは、模倣や類似性、あるいは作者の理解不足や独善を指摘し非難することではなくて、このクリンガーの第一作を、内面に横溢する Genie の自覚と劇作への強烈な意欲の結晶として理解することであり、あるいはこれを、既に同時代の、Sturm und Drang 運動に好意的であった批評家 G. B. v. Schirach も擁護したように、昂揚する精神の所産と認めるべきであり<sup>19</sup>、あの Sturm und Drang とするエポックの、あの Genie 達の運動のひとつの所産、そしてまた Hering の言うように若きクリンガーのドクメントとしての意義を „Otto“ に見出すべきであろう<sup>20</sup>。

#### 注

- 1 Fr. M. Klinger. Betrachtungen und Gedanken über verschiedene Gegenstände der Welt und der Literatur. (Auswahl) Hrsg. von H. Schweppenhäuser. Sammlung Insel 27. 1967. S. 154.
- 2 Max Rieger. Klinger in der Sturm- und Drangperiode. 1880. S. 7. „Klinger absolvierte das Gymnasium am 24. Sept. 1772, danach wurde er Mitgenosse der literarischen Societät“.
- 3 Teutscher Merkur. Nr. 8. 1774. S. 174-184. Aus „Die Sturm-und-Drang-Bewegung“ (1952) von R. Pascal in »Sturm und Drang«. Hrsg. v. M. Wacker. 1985. S. 25.
- 4 Herders Sämmtliche Werke. Hrsg. von B. Suphan. 1877. Bd. 8, S. 322ff. „Jedes Geschöpf von lebendigen Kräften ist Genie auf seiner Stelle, zu seinem Werk: an unendlich verschiednen lebendigen Kräften ist die gesunde Natur reich.“ Aus »Sturm und Drang« Hrsg. v. M. Wacker. 1985. S. 8.
- 5 Dichtung und Wahrheit. 12. Buch. Goethes Werke. Hamburger Ausgabe. Bd. 9. 1959. S. 519 ff.
- 6 Chr. M. Wielands Übersetzung „Shakespeares Theatralische Werke“

- (1762-1766).
- 7 Dichtung und Wahrheit. 15. Buch. Goethes Werke. H. A. Bd. 10. 1959. S. 58.
  - 8 M. Rieger. Klinger in der Sturm- und Drangperiode. S. 12 ff.
  - 9 Aus „Literatursatire im Sturm und Drang“ (1969) von W. Rieck in »Sturm und Drang«. Hrsg. v. M. Wacker. 1985. S. 147 ff.
  - 10 Dichtung und Wahrheit. 18. Buch. Goethes Werke. H. A. Bd. 10. 1959. S. 122 ff.
  - 11 Goethe an Auguste Gräfin zu Stolberg. 7. - 10. März 1775. H. A. Goethes Briefe. Bd. 1. 1962. S. 179.
  - 12 Aus „Klingers Schauspiel ‚Sturm und Drang‘“ (1973) von G. Kaiser in »Sturm und Drang«. Hrsg. v. M. Wacker. 1985. S. 316.
  - 13 Briefe von und an J. M. R. Lenz. Hrsg. von K. Freye und W. Stammeler. 1918. Bd. 1. S. 267 ff.
  - 14 Dichtung und Wahrheit. 14. Buch. Goethes Werke. H. A. Bd. 10. 1959. S. 12 ff.
  - 15 Fr. M. Klingers dramatische Jugendwerke. In drei Bänden. Hrsg. von H. Berendt und K. Wolff. 1912. Einleitung. S. XVIII.
  - 16 Chr. Hering. Fr. M. Klinger. Der Weltmann als Dichter. 1966. S. 26.
  - 17 Briefe an und von J. H. Merck. 1838. Bd. 2. S. 287.
  - 18 Fr. M. Klinger. Werke. Historisch-kritische Gesamtausgabe. Bd. I. Hrsg. von E. Harris. 1987. Einleitung. S. IX.
  - 19 Ebd. S. XII.
  - 20 Chr. Hering. Fr. M. Klinger. Der Weltmann als Dichter. 1966. S. 53.

#### テ キ ス ト

- Fr. M. Klinger. Werke. Historisch-kritische Gesamtausgabe. Band I. Hrsg. von E. Harris. 1987.
- Fr. M. Klingers dramatische Jugendwerke. In drei Bänden. Hrsg. von H. Berendt und K. Wolff. 1912.
- Fr. M. Klinger. Betrachtungen und Gedanken über verschiedene Gegenstände der Welt und der Literatur. (Auswahl) Sammlung Insel 27. Hrsg. von H. Schweppenhäuser. 1967.

- Goethes Werke. Hamburger Ausgabe. Band 4. 1960. Band 9. 1959. Band 10. 1959.
- Goethes Briefe. Hamburger Ausgabe. Band 1. 1962.
- J. M. R. Lenz. Gesammelte Schriften. Hrsg. von Fr. Blei. Vierter Band. 1910.
- J. M. R. Lenz. Werke und Briefe in 3 Bänden. Hrsg. von S. Damm. Band 2. 1987.
- Briefe von und an J. M. R. Lenz. Hrsg. von K. Freye und W. Stammler. Erster Band. 1918.

#### 参 考 文 献

- Klinger in der Sturm- und Drangperiode. Dargestellt von Max Rieger. 1880.
- Chr. Hering. Fr. M. Klinger. Der Weltmann als Dichter. 1966.
- Sturm und Drang. Hrsg. von M. Wacker. 1985.
- Fr. Osterwalder. Die Überwindung des Sturm und Drang im Werk Fr. M. Klingers. 1979.
- W. Emrich. Goethes Tragödie des Genius. in »Bausteine zu einem neuen Goethe« Hrsg. von P. Chiarini. 1987.
- Götz von Berlichingen. Interpretation von W. Große. 1993.
- Chronik von Goethes Leben. Insel-Bücherei. Nr. 782. 1963.

## Goethe und sein Zeitgenosse

— Goethe in Frankfurt und Fr. M. Klinger —

Mitsutomo MARUYAMA

Als einer der Zeitgenossen Goethes wird Fr. M. Klinger (1752-1831) abgehandelt. Beide verband eine Jugendfreundschaft und eine Mitgliedschaft im literarischen Kreis in Frankfurt. Ihre persönliche und zugleich auch literarische Beziehung, der eine als begabtester Führer jener literarischen Bewegung, der andere als deren leidenschaftlichster und eifrigster Anhänger, war in den Jahren 1772-74 am engsten, wie dies z. B. Klingers Großneffe M. Rieger festhält, oder etwa auch die Tatsache zeigt, daß Klingers Erstlingsdrama „Otto“ (1774) eine Nachahmung von Goethes „Götz von Berlichingen“ (1773) war.

Die Sturm-und-Drang-Bewegung war eine spezifisch deutsche nationale Literaturerscheinung in jener Epoche. Sie entsprang Goethes Begegnung mit J. G. Herder im Herbst 1770 in Straßburg. Die von Herder beeinflusste Verklärung Goethes wurde der Keim der neuen Bewegung, die dann von der jungen Generation, so J. M. R. Lenz, H. L. Wagner, J. H. Merck, Fr. Müller u. a., unterstützt und erweitert wurde. In Goethes Heimatstadt Frankfurt, wo dieser etwa vier Jahre, abgesehen von einem kurzen Aufenthalt in Wetzlar, dichterischem Schaffen nachging, bildete sich ein literarischer Kreis, dessen Mittelpunkt Goethe war. Diesen „geselligen Kreis“ verband auf Grund des zeitgenössischen Geniekults eine starke geistige Verbindung. Neben den jungen literaturliebenden Frankfurtern, J. A. Horn, J. J. Riese, Gebrüder Schlosser u. a., wurde Klinger nach Herbst 1772 Mitglied dieser kleinen

„Societät“.

Man muß hier auch die streng kritische oder sogar kämpferische Haltung dieser Sozietät sehen. So tadelte Goethe Chr. M. Wieland, daß er in seiner Übersetzung Shakespeares Dramaturgie entstellte, und er machte ihm noch in der Farce „Götter, Helden und Wieland“ (1773) einen Vorwurf, da sich Wieland in seinem Singspiel gegen die großen Griechen erklärt hatte. Diese Phase ist gerade das „Vorpostengefecht“, von dem Goethe im 18. Buch in „Dichtung und Wahrheit“ spricht. Seine Mitgenossen, die Stürmer und Dränger, fochten die heftigen Kämpfe auf dem Feld des dramatischen Schaffens aus, wo sie, die Elite im Bürgerstand, fern sozialer Beschränkungen ihren eignen Gefühlen freien Lauf lassen konnten und hierbei durch Selbstprojektion ihr eigentliches Dasein finden konnten.

Klinger, der bald nach Absolvierung des Gymnasiums im September 1772 an dem Kreis teilnahm, war zunächst noch weltfremd, doch wurde gerade deswegen eifrig und tatkräftig. Er fand im tätigen Schaffen und Treiben des Kreises erst das, was seine Natur forderte. Starker Wille und heiße Leidenschaft zur Dichtung steigerten sich rasch in ihm. Er gewann als Mitgenosse zu dieser Zeit weit mehr: das enge freundschaftliche Verhältnis mit Goethe und den Teilnehmern der Sturm-und-Drang-Bewegung. Goethe schildert in „Dichtung und Wahrheit“ (14. Buch) die äußerliche und innerliche Gestalt des jungen Klinger genau und treffend und bekundet seinen schweren Verhältnissen, die er durchstürmen und durchdrängen mußte, warme Anteilnahme. Goethe war Klinger so sehr zugetan, daß er den Studien Klingers in Gießen (1774-76) eine finanzielle Unterstützung gewährte.

Klingers Erstlingsdrama, das Ritterstück „Otto“ (1774), wird seit jeher von vielen Kritikern fast schematisch auf Schwächen

hin beurteilt; erstens sei es im großen eine Nachahmung des „Götz“, zweitens fänden sich dort Entlehnungen aus Shakespeares „King Lear“, schließlich ein absichtliches Ignorieren der Regel der dreifachen Einheiten und Spaltungen der Haupthandlung. Das ganze Milieu von „Otto“ ist jedoch anders als im „Götz“, die mittelalterliche Teutschheit des „Götz“ ist im „Otto“ unklar oder vielmehr nirgends zu finden. Auch zwischen Goethes Verständnis der shakespearischen Dramaturgie und dem Klingerschen Verständnis gibt es einen erheblichen Unterschied. Aber es soll hier herausgearbeitet werden, daß man das Erstlingsstück trotz seiner vielen technischen Mängel als die Frucht eines Genies, eines zum dichterischen Schaffen getriebenen Willens gelten lassen kann und sollte. Ja, „Otto“ ist und bleibt, wie es Chr. Hering beurteilt, ein Dokument des jungen Klinger, der nach allen Kräften sein eignes Drama zu schaffen suchte.